

高等学 校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

家 庭

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	4
V	研究内容	7
VI	研究の成果	22
VII	今後の課題	23

研究主題	家庭や地域の中の生活者として自覚をもたせる授業改善 と学習評価の充実
------	---------------------------------------

I 研究主題設定の理由

家庭科教育は社会や家庭の中で営まれる生活に密接に関わっており、学習する領域が、家庭生活、家庭経済、衣生活、食生活、住生活、高齢者、保育と広範囲となっている。

さらに、現代の生徒の生活環境は多様であり、生活体験や価値観も多様であるため、生活の仕方に唯一の正解はなく、生徒は自らの力で自己の価値観を育成し生き方を模索しなければならない時代となっている。

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂及び必要な方策等について」（平成28年12月21日）（以下「答申」という。）においても、「子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合っており、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と明確に示されている。

「高等学校学習指導要領解説 家庭編」（文部科学省 平成30年7月）では、「家庭科改訂の趣旨及び要点」において、「家庭生活や社会環境の変化によって家庭や地域の教育機能の低下等も指摘される中、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。」と指摘されているように、本研究員の感じる生徒の実態も同様である。

研究員の全体テーマでは『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善であり、今年度の高校部会テーマは「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」である。

はじめに、本研究では、家庭科における「これからの時代に求められる『資質・能力』」を、以下のように新学習指導要領に基づき、次のように共通理解を図った。

【知識及び技能】生活の営みを総合的に捉え、生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解を図り、それらに係る知識と技能を身に付ける。

【思考力・判断力・表現力等】生活の中から課題を設定する力と、その解決策を構想して、実践・評価・改善（PDCAサイクル）を意識させることによって、課題を解決する力を養う。

【学びに向かう力・人間性等】様々な人々と協働し、家庭・地域社会の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。

この共通理解を基に研究主題を設定する中で、生徒は義務教育から続く一連の家庭科教育で【知識及び技能】を一定程度は身に付けているが、その学習が実生活と結び付いていない点が大きな課題であることが浮かび上がってきた。家庭科教育は、【知識及び技能】を、培った【思考力、判断力、表現力等】で、自らの生活に積極的にいかそうとする【学びに向かう力、人間性等】の育成まで一貫して行われるものである。しかし、現状では【知識及び技能】と、【思考力、判断力、表現力等】、【学びに向かう力、人間性等】が分断され、国立教育政策研究所の調

査¹においても、高校生が学んだことを日常生活にどう活用できるかを考える割合は「よくしている」6.0%、「どちらかといえばしている」15.1%にとどまっており、その要因として、生徒が自らを生活者である自覚が不足していると考え、その「自覚」を促す授業について研究することとした。

中央教育審議会の答申では「学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするのではない」と示され、授業者は、「学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意志的な側面を捉えて評価すること」が求められている。

また、国立教育政策研究所によるプロジェクト研究調査²では、答申の「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる」という記述に注目している。

これらのことから、本研究では、どのような学習活動を、どのように学習評価につなげていくのかも併せて研究することとし、本研究主題を「家庭と地域の中の生活者として自覚をもたせる授業改善と学習評価の充実」とした。

Ⅱ 研究の視点

本研究では以下の二つの視点から、研究及び検証授業を行うこととした。

視点1：実践的・体験的な学習によって、生活者としての自覚をもたせる

○自覚をもたせる授業

授業において、実践的・体験的な活動を行うことで、学習で得たことを実際の生活に活用し、自己の生活の各場面で問題を見だし、課題を設定し、その解決を図りながら、家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てることが必要である。学習活動で得た知識や技能を自己の生活に活用するためには、授業内容を自身の家庭生活に直結させる必要がある。

そこで実践的・体験的な活動を生徒自身の家庭生活に結び付けるとともに、「分かる・身に付く」「自信が付く」「活用しようとする」という生徒の変容が、授業で学んだことを自己の生活に活用することにつながると考えた。

そのため、授業や単元の目標を明確にし、R80³を用いた授業の振り返りや自己の生活の振り返り

¹国立教育政策研究所(平成25年3月)「特定の課題に関する調査(理論的な思考)調査結果」

²国立教育政策研究所(平成29年3月)「資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方の研究」

³「R80」とは、茨城県立並木中等教育学校 中島 博司校長先生が提案『R』は、「リフレクション(振り返り)」と「リストラクチャー(再構築)」、『80』は、「自分で80字以内の文章」を書くという意味。

返りを目的としたワークシート等を授業に取り入れることで、生活者としての自覚を促すことができると考えた。

視点2：生活者としての自覚をもたせることによって、主体的で自立した生活者を育成する

○生活者としての自覚の重要性

家庭科の授業は、普段の生活や社会に出た際に役立ち、将来生きていく上で重要であるという認識はある一方で、家庭や地域の教育力の低下が指摘されていると答申に示されているように、多くの生徒は、家族の一員として協力することへの関心が低く、家族や地域の人々との関わり、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないという傾向が見られる。また、家庭環境の多様化により、生徒一人一人が自己の生活課題を見いだすことや、学習で得た知識や技能を自己の生活に活用できていない現状がある。

そこで、グループなどで対話する協働的な学習を通して多様な意見や価値観があることを知るとともに、自己の生活を振り返る機会を設定することが重要である。自己の生活を振り返ることにより、よりよい生活の実現に向けて実生活上の課題を把握することができる。生徒はその課題を解決するために工夫したり、新たな発想を創造したりしようとする。このように、身に付けた知識や技能を課題解決に活用する機会を取り入れることで、生活者としての自覚をもち、主体的に考え行動する、自立した生活者を育成することができると考えた。

Ⅲ 研究仮説

本研究では以下のように仮説を設定した。

- 体験的な学習や自己の生活の振り返りを繰り返すことで、学習内容が身近な事象と結び付く。
- 協働的な学習を通して到達点を再確認し、生活課題が明確になる。
- 授業の目標を明確にし、的確に教員が評価することで、生活者としての自覚をもたせることができる。
- 他者と身近な事象・生活課題について情報共有することで、自己の学びを整理することができる。

『資質・能力』の育成とは、生徒が学習内容を自己のこととして捉え、授業で学んだことを実際の生活で活用しようとする姿勢を育むことであり、「家庭や地域の生活者として自覚をもたせる」ことではないかと考えた。また、学んだことを実際の生活で生かすためには、内容を理解し、生徒が「自己のこと」として捉える必要があると考えた。

そこで、本研究では「学習内容を理解し定着を図る」ための活動と「生活で活用する姿勢を育成する」ための活動を授業に取り入れることにした。学習内容を理解し定着を図るためには、自己の生活を振り返るなど実践的・体験的な学習を行うことにした。また、学習した内容を活用する姿勢を育成する方策として、身近な事象と結び付け、他者の立場に立ち想像する機会を増やすため、協働学習を取り入れることにした。さらに、あらかじめ到達目標を示してから協働学習を行うことで、生徒の課題に対する到達度が確認しやすくなるとともに、生活における課題が明確になるとも考えた。

評価については、教員が体験的・実践的学習や協働学習時に生徒の行動を観察し、「自らの学びをよりよくしようと取り組んだり努力したりしている姿を評価」⁴するために、適切な方

⁴ 教育課程部会児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ（平成29年12月11日実施）「学習評価の現状と課題」による。

法を検討する必要がある。評価方法については、授業の目標と評価規準を予め示し、到達度が分かるようにすることや、学んだことを生活でどのように活用しようとしているかが分かるような課題を設定し、実践的・体験的な活動を通して「分かる・身に付く」「自信がつく」「活用しようとする」という生徒の変容を読み取ることが適切であると考えた。

IV 研究方法

研究を進めるに当たり、複数の単元で活用できる学習活動を具体的方策として設定し、部員が共通して取り組むことで授業改善を図り、仮説を検証できるようにした。

1 具体的方策

(1) 自己の生活を振り返るとともに、学習の定着を図るためのワークシートを作成する。

ア アンケートの実施

家庭科の授業内容を、実際の生活と結び付けて具体的にイメージするために、アンケートを行う。アンケートでは、生活の中にある課題の発見やその解決方法に気付くことが必要である。アンケートは、学習事項について①知っているか、②何ができるか、③自身の生活上の課題についてどの程度把握しているか、これまでの自己の体験や既に身に付けている習慣や技術を確認する。

イ 学習の定着を図るためのワークシートの活用

学習内容の定着を図るために授業のまとめで、「振り返り」を行う。振り返りでは、その授業で何をどのように考え、何を理解し、何を得られたかについて、「R80」を活用し、ワークシートに記述する。ワークシートに記述することで、思考を整理し、学んだことを応用しようとするなど主体的に学ぶ態度の育成が期待できる。

(2) 体験的な学習（演習・実習・疑似体験など）のねらいを教師が意図的に生徒に示す。

体験的な学習は学びを実感しやすい学習活動であるが、授業の目標がうまく伝わらず、振り返りの時点で生徒が何を学んだか十分理解できていない場合がある。身近な事象と結び付けて考えを深めることができよう、授業の始めに学習のねらいを示し、生徒が今行っている学習にどのような意味があるのかを意識させる。

(3) 他者と身近な事象・生活課題について情報共有し、自己の学びを整理するための協働学習を実施する

授業展開の工夫として、グループ学習の場を設定し、他者との協働的な学習を通して、他の生徒と相互に学ぶことで、他者の経験から学び、実体験の不足を補うとともに、学習内容を言葉で表現することで自己の考えが整理され、学びをどのように活用するか考えを深められるようにする。

話し合い活動では、グループ内で司会、発表、記録など一人一人役割を設定し、全員が活動に参加し、学習への理解を深め、それが自信につながるような支援を行う。

(4) 授業の目標に沿った評価基準の作成と評価方法を工夫する

単元や授業の始めにルーブリック評価表を生徒に示し、生徒に評価基準を伝えることで、学習への取組の向上を図るとともに、評価表に基づく自己評価の機会を与えることになるため、生徒が学習の定着状況を自分自身で確認することができ、学習に取り組む姿勢を振り返ることができる。

また、ルーブリック評価表の内容を毎時間確認し、自己の現状や目標に対する課題を知ること、生徒の意欲を喚起する。

2 検証方法

単元又は授業の始めには、生徒の生活を振り返ることができるアンケートを実施する。授業、単元の最後にはワークシートを記入させ、学習の定着が図れたか変容を見取る。

ルーブリック評価表を活用し、「何を理解しているか、何ができるか。」といった「知識及び技能」の定着を図るものと、「どのように活用していくか。」の「思考力、判断力、表現力等」を記入させ、検証、分析する。

以下に本研究で使用するルーブリック評価表を示す。

〈ワークシートの評価の例〉

	A (4点)	B (3点)	C (2点)	D (1点)
学習内容の理解 【知識及び技能】	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの記入が全てでき、重要事項をメモするなどの工夫をしている。 〇〇について、具体的な内容を多面的に理解し、〇〇と関連付けて表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が全てできている。 〇〇について、具体的な内容を多面的に理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が全てできている。 〇〇について、具体的な内容を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が不十分である。 〇〇について理解が不十分である。
学習内容を、身近な事象と関連付け生かそうとしている。 【思考力、判断力、表現力等】	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇について、自分の生活と結び付け、よりよい生活にしようとする具体的な記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇について、自分の生活と結び付けようとする具体的な記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇について、自分の生活と結び付けようとする記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇について、自分の生活と結び付けようとしている記述がない。

研究構想図

全体テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

【知識及び技能】

- ・生活の営みを総合的に捉え、生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解を図り、それらに係る知識と技能を身に付ける。

【思考力、判断力、表現力等】

- ・生活の中から課題を設定する力と、その解決策を構想して、実践・評価・改善（PDCAサイクル）を意識させることによって、課題を解決する力を養う。

【学びに向かう力・人間性等】

- ・様々な人々と協働し、家庭・地域社会の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

- ・生徒に自信をもたせる機会や、主体的・積極的に活動する機会が十分に与えられていない。
- ・生徒が身に付けた知識及び技能を実際に活用する機会が少ない。生徒自身が実生活上の課題を把握する手だてが示せていない。

【課題】

- ・生徒が自己肯定感を高め、主体的・積極的に活動できるよう、協働的な学習の場面をつくる。
- ・学習で習得した内容を自己の生活を振り返るとともに、自分のこととして受け止め、実際の生活に活用しようとする機会を増やす必要がある。

【テーマ設定のための着眼点】

- ・主体的で自立した生活者を育成するためには、一連の授業から「分かる・身に付く」「自信がつく」「活用しようとする」という生徒の変容を生徒自身が振り返りとともに、生活者としての自覚が必要であることに着目した。

高等学校家庭部会主題

家庭や地域の中の生活者として自覚をもたせるための授業改善と学習評価の充実

仮 説

- ・体験的な学習や自己の生活の振り返りを繰り返すことで、学習内容が身近な事象と結び付く。
- ・協働的な学習を通して到達点を再確認し、生活課題が明確になる。
- ・授業の目標を明確にし、的確に教員が評価することで、生活者としての自覚をもたせることができる。
- ・他者と身近な事象・生活課題について情報共有することで、自己の学びを整理することができる。

具体的方策

- ・自己の生活を振り返る、学習の定着を図るワークシートを開発し、授業で活用する。
- ・体験的な学習（演習・実習・疑似体験など）のねらいを、教師が意図的に生徒に示す。
- ・協働学習は、実生活に沿った課題を題材に、話し合い活動をする。
- ・授業の目標に沿ったルーブリック評価表を作成し、生徒に示し、評価する。

検証方法

- ・単元又は授業の導入で簡易的な生活の振り返りアンケートを実施し、内容から生徒の実情を知る。
- ・ルーブリック評価表等を活用し、生徒が生活者として自覚をもてたか検証・分析する。

V 研究内容

実践事例 1

教科名	家庭	科目名	家庭総合	学年	1年
-----	----	-----	------	----	----

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名：第7章 「衣生活」

イ 使用教材：教科書「家庭総合 ともに生きる明日をつくる」教育図書

副教材「最新生活ハンドブック」第一学習社

(2) 単元（題材）の目標

- ・衣服の機能や着装について科学的に理解し、ライフステージに合わせた着装について考えることができる。
- ・洗濯・手入れなど自らの衣服を管理する知識や技能を身に付ける。洗剤の働きや汚れが落ちる仕組、洗濯方法などについて科学的に理解することができる。
- ・既製品の購入など、自分に合った被服の選択ができる力を身に付ける。
- ・衣生活の文化や伝統に関心を持ち、主体的な衣生活を営むことで自分や家庭の生活の意識向上を図ろうとする。

(3) 単元の評価規準

ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等	ウ 主体的に学習に取り組む態度
着装、被服材料、被服の構成、被服製作、被服管理などについて、科学的に理解し、心豊かで充実した衣生活を主体的に営むために必要な知識や技術を身に付けている。	着装、被服材料、被服の構成、被服製作、被服管理などについて課題を見付け、その解決を目指して思考を深め、適切に判断し、表現している。	着装、被服材料、被服の構成、被服製作、被服管理などの衣生活の科学と文化に関心を持ち、意欲的な態度で学習活動に取り組んでいる。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（20時間扱い）

	時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
			ア	イ	ウ	
第一次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうして衣服を着るのか考える ・ 世界の民族衣装について考える 	●	●		<ul style="list-style-type: none"> ・ 服の成り立ち、役割について理解しているか。(ワークシート) ・ 民族衣装は、その国の気候や風土に影響されていることについて考えることができたか。(ワークシート)
	2 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 被服の保健衛生的機能と社会的機能について考える。 		●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・ TPOに応じた着装や暑さや寒さに対応した着装について考えを深めることができたか。(ワークシート)

	4	・織物と編物の特徴を知る。	●			・織物と編物の違いについて理解することができたか。(ワークシート)
第二次	5 ∪ 6	・衣服の素材について理解する。	●	●		・素材に触れ、手触りを確認し、衣服に関する知識を深めることができたか。(ワークシート)
	7 ∪ 8	・被服材料の性能について理解する。	●			・様々な被服材料の性能について理解することができたか。(ワークシート)
	9	・洗濯の仕組みについて理解する。	●			・界面活性剤の働きについて理解することができたか。(ワークシート)
	10	・衣服の管理について理解する。(本時)	●	●		・衣服の種類によって洗濯の方法が違ふことを理解することができたか。(ワークシート) ・衣服の管理を今後の衣生活にどのように生かすか考えることができたか。(ワークシート)
第三次	11	・衣生活と環境について考える。	●	●		・衣服のリサイクルについて理解できたか。(ワークシート) ・衣生活も環境問題と関わりがあることを理解できたか。(ワークシート)
	12 ∪ 20	・衣服の制作について実習に取り組む。	●		●	・衣服は購入するだけでなく、自分で作ることができることを理解できたか。(ワークシート) ・制服の裾のほつれを補修するなど、自分の衣生活に活用できることを考えることができたか。(ワークシート)

(5) 本時 (全 20 時間中の 10 時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 自分の衣生活の問題点について考えようとする。
- (イ) 衣服の手入れ(洗濯)の際に注意する点や衣服の取扱表示について理解する。
- (ウ) グループ活動に意欲的に取り組む。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) アンケートや、事例を用いた学習を通して自己の課題を明確にする。
- (イ) 授業の目標に沿った振り返りを行い、授業内で共有する機会を設け、生活者としての自覚をもたせる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 出欠を確認する。 本時の学習内容を理解する。 本時の目標と評価規準を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習内容、目標を説明する。 	
展開 35分	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">衣生活（洗濯）を振り返ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> 衣生活のアンケートから自分の衣生活への知識や問題点を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートから、自分の衣生活に関する知識や課題を明らかにする。 	生徒が自身の生活を振り返り洗濯の方法や、衣服の取扱いについての程度関心をもち理解しているか。(イ)
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">衣服の洗濯について考えてみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークを用いて、衣服を洗濯するときに注意する点を考える。 グループで話し合い、まとめる。 グループで話し合った内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 取扱表示に気付かせる。 気付いたことを話し合うように指示する。 	衣服の種類によって洗濯方法が違うことや取扱表示を読み取ることに気付くことができるか。(ア・イ)
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">衣服の表示を調べ、日常生活に活用しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 体操服の表示を書き出し、意味を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校での学習や、高校での既習事項と結び付ける。 取扱表示の意味を理解させる。 	取扱表示に意味を理解しているか。(ア)
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の授業を振り返りR80でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の衣生活にどのように活用させていくか考えさせる。 記述内容を発表する。 	話し合いの内容を再度まとめ直し、学習内容を生活に活用しようとしているか。(ア・イ)

(6) 本時のルーブリック

	A	B	C	D
取扱表示の見方を理解する。 【知識及び技能】	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの記入が全てでき、重要事項をメモするなどの工夫をしている。 取扱表示について具体的な内容を多面的に理解し、洗濯と関連付けて述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が全てできている。 取扱表示について、具体的な内容を多面的に理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が全てできている。 取扱表示について、具体的な内容を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートへの記入が不十分である。 取扱表示についての理解が不十分である。
衣服の手入れについて生活に生かす。 【思考力、判断力、表現力等】	<ul style="list-style-type: none"> 取扱表示について、自分の生活と結び付け、よりよい生活にしようとする具体的な記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 取扱表示について、自分の生活と結び付けようとする具体的な記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 取扱表示について、自分の生活と結び付けようとする記述がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 取扱表示について、自分の生活と結び付けようとしていない記述がない。

(7) 本時の振り返り

ア アンケートの実施

授業の導入時に、生徒が生活の中で洗濯について、どの程度理解し、活用できているかを生徒自身が確認することができるような質問を、以下のように設定した。

「自分で洗濯しますか。」という質問に対しては表1のような結果になった。

表1：アンケートの結果

①自分で洗濯しますか。
 毎日 週2～3回 月に数回 ほとんどしない
 ②自分が着ている服をどのように洗っていますか。
 ※靴下 ※体操着 ※制服のブレザー ※ブラウス、ワイシャツ
 ③洗濯の失敗はありますか。あるとしたらどのようなことですか。

質問 ①「自分で洗濯しますか」	
毎日	5%
週2～3回	33%
月に数回	12%
ほとんどしない	50%

また、自分が着ている服の洗濯方法については、靴下は洗濯機を使用するか、手洗いをする、体操着は洗濯機を使用、制服のブレザーはクリーニング、ブラウス、ワイシャツは洗濯機を使用する部分的に手洗いをする等、多くの生徒が同じように回答した。洗濯の失敗については、色落ち、色移り、衣類の縮みをあげる生徒が多かった。

①の質問に対し毎日、又は週2～3回洗濯をしていると回答した生徒は、衣類の洗濯の方法について「つけ置き」や「カフス、襟を洗う」など細かく方法を記述していた。また、洗濯の失敗についても、洗濯をほとんどしない生徒は「色落ち」「縮む」と記述していたのに対し「ティッシュペーパーを入れたまま洗ってしまい、周りの服にもティッシュペーパーがついてしまった。」「カードやゲームをポケットに入れたまま洗った。」「洗濯物を外ではなく部屋の中で干したら、洗濯物が臭くなった。」など、より具体的な内容を記述していた。

アンケートの回答をクラスで共有し、洗濯についての理解度と、家庭での活用について生徒同士が知る機会とした。

イ ワークシートによる振り返りの実施

授業では「制服やセーターを洗濯するとき、どのようなことに注意したらよいか。」という話し合いを行った。本授業のR80による振り返りを行い、話し合いの内容をまとめ直し、話し合った内容をどのように今後に生かしていくかを記入するよう指示した。

学習報告プリント 洗濯の洗濯について考える 1年 組 番 氏名 _____

2. 体験欄

①自分で洗濯しますか。
 毎日 週2～3回 月に数回 ほとんどしない
 ②自分が着ている服をどのように洗っていますか。
 ※靴下 ()
 ※体操着 ()
 ※制服のブレザー ()
 ※ブラウス、ワイシャツ ()
 ③洗濯の失敗はありますか。あるとしたらどのようなことですか。

【目標】・自分の服をどのように洗濯したらよいか考えることが出来る。
 ・振り返り質問について振り返ることが出来る。

1. 次の服はどのようなことに注意して、どのように洗ったら良いですか。

洗濯物	洗濯方法	洗濯の失敗
制服		
セーター		

※振り返り (振り返り：アールエイチ) ※
 ①自分の振り返りとして、グループで話し合ったことを、自分でまとめなおして80字以内で書きます。
 ②必ず、2文 (2センテンス) で書け、2文を接続して結びます。
 ③使用する接続詞の例
 ●理由 (したがって、ゆえに、だから) ●理由 (しかし、だが、ところが)
 ●疑問 (果た、ならば、かつ) ●相対 (一方) ●結果 (ゆえに、そのため)
 ●理由説明 (なぜなら)

本時のワークシート

生徒の記述①	「正しい服の洗い方」
	制服は、落ちにくい汚れがあるので手洗いをして、セーターは縮むことがあるのでしっかり洗い方を見て洗う。だから、今回のことを家族にも話して自分も洗濯するように心掛ける。

生徒の記述②	「衣服の洗い方」
	衣服によって洗い方を変えないと布が傷んだり、しわになったりするから考えて洗わないといけない。また、洗濯を今後することになるのでしっかり覚えておいて生かしていきたい。

生徒の記述③	「洗濯」
	前まで私は制服やセーターの洗い方をよく知りませんでした。しかし形を整えてから洗濯するなど、ジャージの取扱い絵表示を知ることができた。だから、これからは自分で洗濯しようと思った。

生徒は、洗濯や自分の衣生活を振り返り、服の特徴や布の種類に気を付けて洗濯したいという記述が多く見られた。(生徒の記述①) また、衣服の購入時や現在、持っている服も表示を確認して洗濯し、長く着用したいという意見もあった。導入時に行ったアンケートの結果を踏まえ、その後の授業を取り組んだことで、積極的に家事に携わりたいという意見が多数あった。(生徒の記述②③)

また、R80を記述する際、自分の言葉で自己の生活に当てはめて記述するように指示したことから、授業内容の理解度を測ることもつながった。また、振り返りを記入しながら自分が着用している衣服の表示を確認している様子も見られた。

ウ 協働学習の実施

グループでは、4人一組で「制服やセーターはどのようなことに気を付けて洗濯するか。」という内容で話し合った。この設問は、生徒が自身の経験から発言しやすい内容だと考えたためである。

それぞれの家庭での実践や中学校までの学習の知識を生かして話し合うよう指示した。「司会」、「発表」、「記録」、「時計」と一人一役ずつ役割を設定し、話すことが苦手な生徒でも負担感なく、グループに参加できるよう工夫した。その後話し合った内容を紙に書きだし発表した。(発表原稿1) 様々な意見が出る中で、衣服の保健衛生的機能が十分回復されない方法を選択する班(発表原稿2)もあり、発表後にその方法で良いのか改めて生徒に考えさせる場面を設けることができた。

セーター	4班
<ul style="list-style-type: none"> ・傷みやすいから<u>ネット</u>に入れる。 ・毛玉を取る。 ・干すときは形を整える。 ・<u>優しく</u>洗う。手洗い(髪の毛を洗うイメージ) 	

発表原稿①

セーター	5班
<p>〈気を付ける点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縮まないように、<u>洗わない</u>。(消臭剤の使用) ・傷まないようにする。 <p>〈洗い方〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取扱表示に従う! ・洗濯機で洗って、縮んだら干す時に伸ばす。 	

発表原稿②

エ ルーブリックの活用

授業の導入「自分の服をどのように洗濯したらよいか考えることができる、取扱い表示について読み解くことができる。」という目標と、ルーブリック評価表を示し、生徒に評価の判断基準を伝えた。ルーブリック評価表の到達度は、AからDまでの4段階とした。4段階に設定したのは、Bの評価に集中するという中心化傾向を避けるためである。

評価を生徒に示すだけでなく、生徒から評価についての意見や考えを聞く機会を設定し、より明確な評価規準を示すことも必要であると感じた。

オ 学習評価と授業改善

ルーブリックの評価基準から振り返りを評価した。評価は4段階とし、以下のようになった。

表2：ルーブリック評価の結果

A	B	C	D
30%	55%	15%	0%

この振り返りは、ポートフォリオとして積み重ね、学期末の評価の一観点とした。生徒によっては、文章を書くことに慣れていないため、十分に自分の意見を表現できていないことから、繰り返し練習する必要があることが分かった。

評価では、生徒の記述をルーブリック評価表を用いて、どのように評価するかが課題となった。生徒の記述は教師の予想以上に自由に記入しており、作成した評価表と必ずしも合致しない表現があった際にどのように扱うか判断に迷うことがあった。そのため、評価表の文言を改めて整理していくとともに、評価についても共通理解を深めていくことが重要である。

また、学習を通して「何が身に付いたのか」を生徒に意識させるためには授業で振り返りを記入するときに、ルーブリックと目標を再度示し、学習内容をまとめさせることが必要である。さらに、ワークシートを翌週に返却し、評価について生徒に具体的に示すことで、記述内容がより深まるのではないかと考えた。

実践事例2

教科名	家庭	科目名	家庭基礎	学年	2 学年
-----	----	-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 第5章 食生活をつくる

イ 使用教材 教科書「家庭基礎 自立・共生・創造」（東京書籍）
副教材「家庭基礎 学習ノート」（東京書籍）

(2) 単元（題材）の目標

- ・食品の栄養的特質と調理上の性質について理解し、献立作成や調理技術の習得を図り、

調理計画を立て、実践することができる。

- ・食生活の環境の変化及び食生活の安全と衛生について理解し、環境、健康や安全に配慮した食生活の管理ができる。
- ・自己・家族・日本の食生活の現状と課題について考え、健康と栄養との関わりについて理解し、健康の保持増進に配慮した食生活の工夫について考える。
- ・日本や世界の食文化について理解し、多様なライフスタイルに合わせた食生活について考え、実践することで自分や家庭、地域の生活の充実を図ろうとする。

(3) 単元の評価規準

ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 食生活と健康、栄養、調理、環境、安全と衛生、文化について理解し、食生活を主体的に営むために必要な知識を身に付けている。 ② 主体的な食生活を営むために必要な献立作成や調理、衛生に関する技能を身に付けている。	① 食生活全般について、課題を見出し、解決に必要な情報を集め、適切に判断し、表現している。 ② 学習活動を通して他者と意見を共有するための方法を考え、適切な表現ができる。	① 食生活の課題、健康と栄養、食生活と環境、安全と衛生、文化などについて、関心を持ち、自ら考え表現するなど、意欲的に授業に取り組んでいる。 ② 学習活動を通して他者との意見交換や協働に意欲的に取り組む。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（14時間扱い）

	時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
			ア	イ	ウ	
第一次	2 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・食生活の課題について考える。 ・食生活の課題について理解し、自己の食生活を振り返る。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・現代日本の食生活の課題について話し合い、表現しているか。(グループワーク) ・現代の食生活のキーワードを理解しているか。(学習ノート) ・自己の食生活を振り返り、課題を見いだしているか。(ワークシート)
第二次	6	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の栄養と食品について理解する。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の栄養と食品について理解することができたか。(学習ノート) ・栄養と食品に関心を持ち、意欲的に取り組んでいるか。(学習ノート・ワークシート)
第三次	2	<ul style="list-style-type: none"> ・食品の安全と衛生について理解する。 ・食中毒予防のDVDを視聴する。 ・実習の注意点を考えまとめる。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・食の安全と衛生について知識・技能を身に付けているか。(ワークシート) ・調理実習に向けて意欲的に学習に取り組んでいるか。(ワークシート)

	2	<ul style="list-style-type: none"> 調理実習を通して、計量、段取り、手法を理解し実践する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 他者と協議・協力しながら作業に参加できているか。(グループワーク) 学習課題を的確に理解し、解決しようとしているか。(グループワーク) 実習を通して自己を的確に評価しているか。(ワークシート)
第四次	2	<ul style="list-style-type: none"> 生涯の健康を見通した食事計画について理解し、計画を立てる。 持続可能な食生活について考え理解する。 日本の伝統的な食文化について知る。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ライフステージごとに健康的な食事計画を立てるための知識及び技能を身に付けているか。(学習ノート・ワークシート) 自己の生活に適した食事内容を考え、表現できるか。(学習ノート・ワークシート) 日本の伝統的な食文化に興味をもち、積極的に生活に生かそうとしているか。(ワークシート)

(5) 本時（全 14 時間中の 2 時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 現代日本の食生活の課題について理解する。
- (イ) 自己の食生活の課題を知り、改善しようとする。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) アンケートや本時の学習を通して自己の課題を明確にする。
- (イ) 話し合い活動の中で他者の意見に触れ、自己の意見を述べることで課題を共有する機会を設け、現代日本の課題を明確にする。
- (ウ) 授業の目標に沿った振り返りを行い、生活者としての自覚をもたせる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 出欠を確認する。 5min Reading (新聞記事の要約) 本時の学習内容を理解する。 振り返りシートで自己の食生活の現状を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 5min. Reading によって、学習内容と実生活がつながっている自覚をもたせる。 プレゼンテーションソフトで本時の目標を提示する。 <p>【ルーブリックの提示】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 積極的にワークシートに取り組む(ウ)
展開 ① 15分	<p><グループワーク></p> <ul style="list-style-type: none"> 4人程度で班になり、 <ul style="list-style-type: none"> ①現代日本の食生活の良い点 ②現代日本の食生活の問題点 について話し合い、まとめる。 班ごとに書き出した紙を黒板に貼りだし、生徒の認識を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションソフトで取り組む課題を明示する。 グループワークにおける進め方を確認する。 記入用紙とペンを配布する。 机間指導で必要に応じて声掛けやヒントを出す。 用紙を黒板に掲示し、色ペンでグルーピングしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> グループワーク中の発言の観察(イ・ウ)

展開② 15分	・教科書にある現代の食生活の課題について、教科書と学習ノートに沿って学び、理解する。	・学習ノートを解く時間と解説の時間を分け、主体的に取り組ませる。 ・解説において生徒が集中しやすいよう、工夫する。	・必要な情報を読み取り、学習ノートを解く。(ア・ウ)
まとめ 10分	・本時の学習から、学習内容を振り返り、R80でまとめる。 ・次時への学習の見通しをもつ。	・ワークシートの活用方法についてプレゼンテーションソフトで提示する。 ・机間指導で必要に応じて声掛けやヒントを出す。	・自己の食生活について、本時の学習を生かしてまとめられている。(イ・ウ)

※「5min Reading」とは、新聞の記事を用いて、要約や感想を書く課題である。

(6) 本時のルーブリック評価表

	A	B	C
現代の食生活の課題に関心をもち、考えを表現することができる。【思考力・判断力・表現力等】	話し合い活動を通じて、自分の考えを表現し、他者と考えを共有できる。	話し合い活動を通じて、自分の考えを表現することができる。	話し合い活動を通じて自己の考えを表現できない。
自己の食生活の課題を知り自分のこととして深めることができる【思考力、判断力、表現力等】	様々な食生活の問題について、自分の生活と結び付け、よりよい生活にしようとする具体的な記述がある。	様々な食生活の問題について、自分の生活と結び付けようとする記述がある。	様々な食生活の問題について、自分の生活に結び付けようとする記述がない。

(7) 本時の振り返り

ア アンケートの実施

本時は食生活分野の導入に当たるため、自己の食生活チェックをアンケートとして実施し、生徒の食生活の実態や意識について振り返り、なぜ食生活について学ぶ必要があるのかを実感させた。

また、このアンケートと後述の振り返りのワークシートを連動させるため、裏面には学習の定着を図るためのワークシートを配置した。

このアンケートは、生徒の自己理解を目的としていたが、結果として生徒の食生活の実態や、何に興味・関心が高いのかを授業者が知る上でも有効だった。結果を基に、単元の授業展開や重点を見直すことができた。

アンケートで特に顕著であった項目は、次の表のとおりである。

また、合計点 30 点以上の生徒に挙手をさせ、生徒と高校生の実態の共有を図った。30 点以上は各クラス 5～10 名程度で、食生活について学習する意義を共有できた。

「はい」の回答が多かった項目	「いいえ」の回答が多かった項目
<ul style="list-style-type: none"> ・1日に1回以上は、族や友人と一緒に食事をしている。 ・食事は1日3回食べている。 ・主食として穀類（飯、麺、パンなど）を毎食とっている。 ・食品は賞味期限が切れる前に消費している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・牛乳や乳製品を毎日とっている。 ・スナック菓子や炭酸飲料はあまりとらない。 ・食品を買うときに表示を見ている。 ・夜食や間食はあまり食べない。

イ 学習の定着を図るためのワークシートの活用

R80は、学習の定着を図るとともに、生徒が生活者としての自覚をもてたかどうかを図ることもねらいとしている。しかし、最初のクラスでは授業のねらいである「この学習から自分は今後どのように生活をするのか」について記述できていないワークシートも少なくなかった。(生徒の記述①)

そのため、2クラス目以降は、まとめる際の指示の工夫が必要となった。計5クラスで実施し、指示の工夫を重ねた結果、「1文目は学習したこと。接続詞の後の2文目は、学びを生かして今後どうしたかを書く。」と、振り返らせたいこと、考えさせたいことを明確に示したことによって、生徒も本時の学びの着地点を的確に捉えて記述できるようになり、自己の学習をもう一度振り返り、この先にどのようにつながられるかを生徒自身が主体的に反芻する機会となった(生徒の記述②③)。

しかし、文章力や表現力の差が顕著に表れるため、生徒が感じたことや考えたことをいかに引き出し適切に表現させるかが課題となった。

生徒の記述①	「食生活」
	日本の食がとても豊かだと授業を通して改めて感じることができました。だから、豊かではない部分では、若者が無理なダイエットや栄養の偏りなどがあってもつたいないと思った。
生徒の記述②	「我が国の食は「豊か」なのだろうか。」
	我が国の食は豊かだと思っていたが、よく考えると食材は外国からの輸入が多く、自国の生産量は減っている現状である。だから、自分は国産のものを買うように心掛けたいです。
生徒の記述③	「今の食生活とこれから」
	栄養や衛生面では安心できるが、加工食品や洋食などの影響が大きいのかなと感じた。だから、自らで料理を作るなど、加工食品に頼らないようにしていけたら良いと思った。

ウ 協働学習の実施

本時の協働学習では、4人一組のグループで「日本の食生活が豊かだとしたらその理由は何か。」と「日本の食生活が豊かでないとしたらその理由は何か。」の二つのテーマについて話し合いを行い、箇条書きで三つずつ書き出す課題を出した。

開始前にグループワークの進め方を確認し、全員が積極的に参加できるよう促したが、活発な生徒が主導し、おとなしい生徒がほとんど発言しない班もあった。協働学習には、他者の意見にふれ視野を広げるとともに、他者を思いやる気持ちを育むねらいもあることから、授業者がいかに多くの生徒の発言を促せるかが課題となった。

これまでの授業で鑑賞した映像や、本時の導入で読んだ新聞記事、自己の食生活を振り返るアンケートなどから、比較的スムーズにグループワークを行ったが、机間指導の中でヒントを与える必要のあるグループもあった。

話し合いの結果、あるグループが「豊かである理由」(例:様々な国から輸入している)としてあげたものが、他のグループでは「豊かでない理由」(例:外国からの輸入が多い)としてあがることもあり、それを全体で共有することで、様々な視点から物事を捉える必要性に気付かせることができた。

グループワークの生徒記述

日本の食生活は豊かである理由 ①日本以外の食べ物も食べることができる。 ②コンビニなどに行けばなんでも買えてしまう。 ③衛生面において、日本はトップクラスだといえると思う。【A班】	日本の食生活は豊かでない理由 ①体に悪い食べ物売っている。 ②外国から輸入が多い。 ③自国で生産する量が減っている。【B班】	日本の食生活は豊かである理由 ①色々な種類の食べ物があるから。 ②捨ててしまうくらい食べ物の量が多いから。 ③いろんな国から輸入しているから。【C班】
--	--	---

エ ルーブリックの活用

前回の検証授業を受け、生徒が評価の観点をより理解しやすくするために観点を2点に絞り、評価をAからCまでの3段階とし、一連の学習活動において、本時のねらいをルーブリックで提示したことは効果的であった。

授業者が何をどの観点で評価するかを示すことで、生徒が授業のねらいや目標を意識して取り組むことができることが分かった。また、授業者も、授業のねらいや目標を常に確認しながら授業を進めることができた。

その結果、「学習を自分の生活でどう生かすのか。」を生徒が主体的に考えながら授業に参加することにつながった。

本検証授業では、生徒の実生活や実感に即した授業展開となることが望ましいと考え、生徒が高評価を意識した模範的な解答を探すような思考に偏らないよう、授業開始時にプレゼンテーションソフトで提示した後は、生徒には見えないようにした。しかし、前述のように、授業のまとめで生徒の視点が定まりにくい結果となった。評価規準の適切な提示の方法、提示するタイミングに工夫が必要であることが分かった。

まとめを記述する段階で、学習を振り返らせ、「自分のこととして、これからの生活にどのように生かすか。」を記述できない生徒もいる、そのような生徒には、記述させる前にもう一度ルーブリックを示すなどの手だてが必要である。

オ 学習評価と授業改善

ルーブリックの評価表を用いて、ワークシートを評価した。本授業は、評価をA（よくできた）B（できた）C（できなかった）の3段階とした。以下の通りとなった。

表2：ルーブリック評価の結果

A	B	C
30%	55%	15%

R80を実施することで、知識の理解を計るテストでは計ることのできない生徒の、生活者として物事の捉え方や価値観を知る方法の一つとなった。本検証授業のR80では、生徒は、調理や栄養についてだけでなく、食の社会環境への関心が高いと分かったことから、当初の単元計画よりも授業時間を多くとることで、生徒の学習態度や関心、意欲に合わせた授業改善へとつながった。

実践事例 3

教科名	家庭	科目名	ファッション造形基礎	学年	2年次(自由選択)
-----	----	-----	------------	----	-----------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

- ア 単元名：被服の構成 2 立体構成と平面構成
- イ 使用教材：教科書「ファッション造形基礎」実教出版

(2) 単元の指導目標

- ・人のからだと衣服の関係性や立体構成・平面構成の衣服の特徴を理解することができる。
- ・年齢や性別による体型の違いや人の動作による人体寸法・形態変化について考えることができる。
- ・衣服の構成を理解し、快適な衣服を選べることで、自分や家族の衣生活の向上を図る。

(3) 単元の評価規準

ア 知識及び技能	イ 思考力・判断力・表現力等	ウ 主体的に学習に取り組む態度
人体と衣服の関わり、動作時の人体寸法の変化、立体構成、平面構成の衣服を人体の曲線に合わせる知識を身に付けている。	人体を覆うための被服の形と動作に適応したゆるみ、立体構成、平面構成の違いによる型紙、裁断、縫製の違いを理解し、思考を深めることができる。	人体の構造、寸法や体型と被服のかかわり、立体構成、平面構成の特徴に関心をもち、意欲をもって学習活動に取り組んでいる。

(4) 単元(題材)の指導と評価の計画(2時間扱い)

	時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
			ア	イ	ウ	
第一次	1	人体と被服 ・人体を覆う被服の形 ・動作に適応した被服のゆるみ	●	●	●	・年齢や性別による体型の特徴を理解する。(ワークシート) ・動作による人体寸法の変化を知り、それに応じた衣服を考えることができる。(ワークシート)
第二次	1 (本時)	立体構成と平面構成 ・立体構成と平面構成の特徴	●	●	●	・立体構成・平面構成の特徴を理解する。(グループワーク)

(5) 本時(全2時間中の2時間目)

- ア 本時の目標
 - (7) 衣服について、立体化させる方法を理解する。
 - (イ) 衣服を人体の曲面に合わせて着装する方法を理解する。
 - (ウ) 立体構成と平面構成の違いを型紙の違いから考える。
- イ 仮説に基づく本時のねらい
 - (7) 協働的な活動の中で、他者の意見に触れ自己の意見を述べることで、課題を共有する

機会を設ける。

(イ) 授業の目標に沿った振り返りを行い、生活者としての自覚をもたせる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 出欠の確認をする。 本時の学習内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習内容、目標を説明する。 ルーブリックを提示する。 	
展開 10分	課題1 <個人・グループワーク> <ul style="list-style-type: none"> 立体構成、平面構成の衣服を、どのようなパーツ（型紙）からできているか考える。 グループで発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前期に浴衣を作成しているため、平面構成から記入させる。 直線、曲線に注意しながら型紙を描くように指示する。 型紙から読み取れる違いを記入するように指示する。 トルソーを使用し、布の縦・横に注意しながら、立体化できるように注意する。 着装時に必要なものから読み取れる違いを記入するように指示する。 メリット・デメリットから考えるよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見を聞き、自分の意見を発表できたか。（イ・ウ） 教科書で確認しながら、ワークシートに記入しているか。（ア）
5分	課題2 <グループワーク> <ul style="list-style-type: none"> 型紙から気付いた立体構成と平面構成の違い、特徴をまとめ、発表する。 		
15分	課題3 <グループワーク> <ul style="list-style-type: none"> 型紙・布の立体化について考える。 トルソーと布を用いて、立体化させる部分・方法を考える。 トルソーを使用し、立体化の方法を解説する。 		
5分	課題4 <個人・グループワーク> <ul style="list-style-type: none"> 着装から気付いた立体構成と平面構成の違い、特徴をまとめる。 グループで発表する。 		
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習から、学習内容を振り返り、R80でまとめる。 次回の学習内容を連絡する。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りシートを用いて、本時の学習内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を生かしてまとめられているか。（イ・ウ）

(6) 本時のルーブリック評価表

	A	B	C
被服の構成について理解している。【知識及び技能】	ワークシートの記入が全てでき、重要事項をメモするなどの工夫をしている。被服の構成について、具体的な内容を多面的に理解し、自分の衣生活と関連付けて述べることができる。	ワークシートの記入が全てできている。被服の構成について、具体的な内容を理解している。	ワークシートの記入が不十分である。被服の構成について理解が不十分である。
被服の構成を自分の衣生活として深めることができる。【思考力、判断力、表現力等】	被服の構成について、自分の衣生活を結び付け、よりよい生活にしようとする具体的な記述がある。	被服の構成について、自分の衣生活を結び付けようとする記述がある。	被服の構成について、自分の生活を結び付けようとする記述がない。

(7) 本時の振り返り

ア アンケートの実施

本時は、平面構成・立体構成の違いについての授業のため、生徒の所有する衣服に関するアンケートを実施した。普段着用している立体構成の代表例である洋服については、ある程度、想像ができると考えアンケート項目には入れなかった。一方、平面構成の代表例である浴衣については、現代社会において身近な衣服ではないため、「所有しているか」と「自分で着用できるか」の項目に絞ってアンケートを行った。以下のような結果となった。

浴衣についての質問		
所有していますか	所有している	所有していない
	15名/17名中 (88%)	2名/17名中 (12%)
自分で着用できますか	着用できる	着用できない
	7名/17名中 (41%)	10名/17名中 (59%)

所有している人数が多いのは、選択科目の授業のためファッションに比較的関心が高いことが影響していると考えられる。自分で着用できる人数については約半数であり、洋服と異なり着用すること自体が生徒にとって難しいことが分かる結果となった。

イ ワークシートによる振り返りの実施

学習内容の定着を図るため、振り返りとしてR80に取り組んだ。学習した内容を80字以内にまとめること、2文で接続詞を使用することを条件としているが、初めは記述が不十分であったが、回数を重ね、記述する内容を的確に指示することで、感想のみでなく学習したことを応用しようとする発展的な記述ができるようになった（生徒の記述①②）。

生徒の記述①	平面構成と立体構成
	今回は、平面・立体の二つのパターンの衣服の差を考え、曲線や直線、メリットやデメリットを知ることができた。だからこれから作るスカートが大変そうだと感じた。

生徒の記述②	平面構成と立体構成
	平面構成を立体構成の型紙は直線と曲線のように正反対だった。したがって、平面構成と立体構成の特徴・部分の形などが知れて、服を作る上での知識を増やすことができた。

ウ 協働学習の実施

本時の協働学習では、2グループに分かれ四つの課題に取り組んだ。

課題1の平面構成については直前の授業まで製作していた浴衣の各パーツについて、グループで話し合いながら正確なものを記入できていた。もう一方の立体構成については、始めのクラスではテーラードジャケットを課題として提示したところ、各パーツは比較的書けていたが時間がかかってしまったため、次のクラスでは台襟つきブラウスの課題に変更した。

生徒たちの実生活から、パーツが複雑な組み合わせの衣服を普段着用することが少なく、台襟つきのブラウスが、どのようなパーツで組み立てられているのか理解するのに難しい様子が見られた。先に立体的な衣服を視覚的に見せた上で、課題に取り組む方が分かりやすい。課題を設定する際には、生徒の実際の衣生活で着用されているものを選択するべきであった。

課題2では、課題1の各パーツから読み取れる、平面構成と立体構成の違いを十分に確認できていた。

課題3のトルソーを使用しての布の立体化では、2グループを上半身（トップス）と下半

身（ボトム）にそれぞれの担当について取り組んだ。ボトムを担当したグループは、衣装を作る機会の多い服飾部の部員を中心に、身体の曲線に沿ってダーツやタックを用いて作業することができていた（写真①②）。ウエストとヒップの差に注意することによって比較的簡単に立体化させることができていた。一方、トップスを担当したグループは、バストの膨らみとの差は理解できていたが、身体の曲線に沿って「フィットさせて」という教師からの指示が十分に理解できていなかったようで、布を完全に身体の曲線に沿わすことができていなかった。（写真③④、改善後写真⑤⑥）。

写真①



写真②



写真③



写真④



改善後



写真⑤



写真⑥



課題4では、着装・管理から考えた平面構成と立体構成の違いを話し合った。着装時に必要なもの、洗濯、保管方法など様々な視点から意見が出た。

少人数を生かし課題を多めに設定したため、1時間で行うには難しい面もあったが、発表する機会を複数回設定することにより、発表者が重ならないよう配慮した。他人任せにせず、自分の言葉でまとめ発表することにより、自信につながる機会とすることができた。

エ ルーブリックの活用

1回目、2回目の検証授業から、①知識及び理解②思考力・判断力・表現力等の2項目について、AからCまでの3段階評価とした。

ルーブリックを使用し、評価の観点を示すことで他者の意見に耳を傾けつつも自分の意見を出す積極的な様子が多く見られた。しかし、授業の始めにプレゼンテーションソフトで提示したが、実際に提示していた時間は3分程度であったため、生徒全員が全ての項目に目を通して十分に理解できたとは言えない。短時間で重要な部分を理解するために、配色やアンダーラインなどの工夫が必要であった。

オ 学習評価と授業改善

ルーブリックの評価基準をもとに、ワークシートを評価した。

評価をA（よくできた）B（できた）C（できなかった）の3段階とし、以下のようになった。本科目は選択科目の授業であり、興味・関心の高い生徒が受講しているため、評価Cの割合が比較的低くなったと考えられる。

A	B	C
30%	64%	6%

ワークシートの課題設定では、生徒が考えを深められるよう、より生徒の生活実態に応じた内容にする工夫が必要である。学習を通して「何を学んだか。」で終わらせず、「どのように活用するのか。」まで考えさせるために、教員の発問の工夫が重要となる。

VI 研究の成果

ア アンケートの工夫

三つの検証授業では、授業の導入で「洗濯に対する知識や経験を問う」、「自己の食生活を振り返る」、「平面構成の衣服の着用方法を問う」アンケートを実施した。

生徒の自己の生活の振り返りをしたことで、生徒は実情を知り、学習内容が身近な事象と結び付いたことで、その後の話し合い活動等にうまく結び付けることができた。また、アンケートから学習内容をどの程度理解しているかを教員が把握しやすく、指導の重点項目の設定につなげることができた。

イ ワークシートによる振り返りの実施

学習内容の定着を図るため、R80に取り組んだ。その授業で行った話し合いについて80字以内にまとめ、接続詞を使用することを共通の条件とした。

まとめ方は、「1文目は話し合いの内容、接続詞後の2文目は話し合いの内容を今後どのように生活に活かしていくか。」、「1文目は学習したこと、接続詞の後の2文目は、学びを生かして今後どうしたいか。」と検証授業ごとに内容は多少異なったが、指示を工夫し、授業内容を振り返らせたいこと、考えさせたことを明確にした。このことから、生徒に授業で学んだことを生活にどのように活用するかを考えさせることができた。

ウ 協働学習の実施

協働学習を実施することで、他の生徒と相互に学び、自己の考えを整理し、学びを活用するか深められるきっかけを作ることができた。また、グループワークにおける進め方を示しそれぞれの役割を明確に設定することで、より積極的に参加する姿勢が見られた。

注意すべき点は、話し合いを行うグループワークでは、予想以上に時間が必要であり、生徒の実態に合わせた効果的な課題を設定し、提示方法を工夫する必要がある。また、グループワークでは、他者の意見を聞き、質問をするという活動が大切で、繰り返し実施することによって身に付けることが確認できた。グループ間の意見の共有方法の工夫や、教員による補足説明や助言で、より学習を深めることができる。

さらに、グループワークのみに頼らず、ワークシートを活用することによって、各自が対話的な学習を行う方法もあると言える。

エ ルーブリックの活用

単元や授業の始めにルーブリックを用いて、目標を明示することにより、学習への取り組みが積極的になった。当初、評価をAからDまでの4階としていたが、実際には評価Dは0%の場合が多く、AからCまでの3段階とすることにした。ルーブリックの提示は、授業の始めのみに行ったが、学習を通して「何が身に付いたのか、それをどう生かすのか」につなげられるよう、振り返り前に再度提示するなどの工夫が必要である。また、評価Aの部分の提示方法を工夫することにより、生徒の理解を高めることが大切である。

また、生徒自身が授業で何を身に付けたいのか目標を立てることにより、生徒が見通しをもって主体的に考えながら授業に参加することもできる。

オ 学習評価と授業改善

今回、学習評価の方法として生徒にルーブリックを提示した。自己の現状や目標に対する到達点を示すことにより、生徒の意欲を喚起することにつながった。しかし、ルーブリックを用いた評価だけでなく、学習した内容を将来どのように生かそうとしているかを総合的に評価していくことが重要である。生徒のルーブリックの結果から、評価Cの割合の原因を考察し、ルーブリックの見直しを行い、再度提示するというPDCAサイクルを実施することで、授業を改善していくことにつながると考える。

VII 今後の課題

全体テーマ及び高校部会テーマを踏まえ、部会の主題は、「家庭や地域の中の生活者としての自覚をもたせる授業改善と学習評価」であった。

「生活者としての自覚をもたせる授業改善」と「学習評価」の二つの柱のうち、「生活者としての自覚をもたせる授業」については、授業者の日頃の教育活動から得た知識や技能を土台に、ルーブリックや協働学習、R80を取り入れた授業改善を行った結果、以下の課題が浮かび上がってきた。

家庭部会では、小さな発見や成功体験を通して自己肯定感を高めることにより、実践的態度が育まれると仮説を立てたが、協働学習が必ずしも主体的・対話的で深い学びになるとは限らず、また、協働学習をとおして生徒が必ず発見や成功を体験するとは限らない。

三回の検証授業に共通しての課題は以下のとおりである。

① 生徒に授業の目標を明確にもたせることと、それを継続させること。

授業の始めにルーブリックを用いて授業の目標を生徒に示しても、生徒は様々な学習活動に取り組むうちに最終的な到達点を見失いがちであった。そのため、常に生徒が授業の目標を念頭に学習できるような工夫が課題となった。R80を用いたまとめにおいても、授業の目標に対してどうであったかを考えられるよう促す必要があった。

② 生徒自身が授業で得た発見や成功に気が付かないことも多く、協働学習におけるフィー

ドバックが「分かる・身に付く」「自信が付く」ためには重要であり、生徒の実態に合わせた効果的に学習の定着を図るためのフィードバックの工夫が必要である。

これらの課題には、教師は、生徒に単元や授業の始めに協働学習の意義を理解させるとともに、目の前の活動を行うことで精一杯で、何のために協働学習をしているのか意識できない生徒に対して、見通しをもって安心して活動に取り組み、学習のねらいを意識しながら考えを深めていける環境を整えることが大切である。そのように、一連の学習の流れの中で系統性をもつことで主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善を実現できるのではないかと考える。

部会主題のもう一つの柱である「授業評価」については、検証授業や日頃の授業の中で試行錯誤しながらの研究となった。

答申では、「学習評価の改善・充実等」の具体的な方策として、「社会で生きていくために必要となる力を共通して身に付ける『共通性の確保』の観点と、一人一人の生徒の進路に応じた多様な可能性を伸ばす『多様性への対応』の観点から充実を図っていくことが重要である」と示されている。

協働学習やR80の評価については、各授業者が述べているようにポートフォリオ評価の一つとして扱い、学習評価の一部とすることとした。

これらのことから「家庭や地域の中の生活者としての自覚をもたせる」ためには、どのように「分かる・身に付く」「自信が付く」「活用する」学習活動を行うのか、どのように評価するのかを見据えた授業計画の工夫を重ねていくことが必要である。

特に「活用する」ための実践的な場面は授業内だけでは十分ではないため、実際に活用したいと生徒が思えるよう「分かる・身に付く」「自身が付く」の視点で、授業改善に取り組んでいきたい。さらに、家庭科で学習することを、将来、自立する前から「自分のこと」として捉えられるように、「活用する」場面をできるだけ多く設定することが重要である。そのため、家庭科の授業で学んだことを生かせる学校家庭クラブ活動やホームプロジェクトでの「活用する」活動も積極的に活用しながら、生活の中で主体的に課題を発見し、その課題を改善していこうとする態度の育成を図っていきたい。

平成 30 年度 教育研究員名簿

高等学校・家庭

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立葛飾野高等学校	主任教諭	松 永 夢 佳
東京都立晴海総合高等学校	主任教諭	◎宗 川 良 子
東京都立拝島高等学校	主幹教諭	宮 川 麻衣子

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 永井 愛

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・家庭

東京都教育委員会印刷物登録
平成 30 年度 第 135 号

平成 31 年 3 月発行

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社